

人体の骨格筋 上肢

坂井建雄，加藤公太・著

【評者】 秋田恵一（東京医科歯科大学大学院教授・臨床解剖学）

A4判・240頁
2021年10月
定価：8,800円
（本体8,000円＋税10%）
ISBN978-4-260-04620-6
医学書院 刊



人体の美術展のカタログを手にとっているかのように思える1冊である。まず目に飛び込んでくるのは、写真の美しさである。解剖実習の経験者であれば、この解剖がいかに難しいものであるか、洗練された技術に基づいたものであるかがわかるはずである。また、アトラスのイラストでは、全ての筋の筋線維の方向まで正しく描写することは非常に難しい。われわれは、この筋線維の配列から、筋の運動を知ることができ、躍動感を感じることができるのである。

人体の構造は複雑で緻密であり、美しい。また、非常に機能的である。しかし、機能の追究によって形態ができてきたわけではない。さまざまな形態構造の織りなす作用が複合的に働くことによって、複雑な機能が作り出されているのである。よって、骨格筋を1つ1つ分解して解析するのがよいのか、機能を作り出す単位としていくつかの筋をまとめて解析するのが良いのか、という解剖学的なとらえ方の違いは、研究者によって起こり得る。それでも、やはり1つ1つの筋の形態に関する理解がなくては先に進めない。本書に示される個々の筋の起始、停止、形状、筋束の構成についての解析と文献的考察、そして機能特性に関する記載は、筋のスペックを示す上で非常に重要なデータであり、読者が筋の1つ1つを動く構造体として捉えることを可能とする。これらのデータは、機械の詳細なカタログや取り扱い説明書のように、静止する写真を生き生きとした動画

にさせる、読者の想像力に訴えかける仕掛けとなっている。

本書を開くと、写真の美しさに目を奪われることになるのは致し方ないが、まずは序章を読んできたいと思う。運動器の解剖学を学ぶときには、起始、停止、神経支配、作用を覚えることで、筋について理解したつもりになってしまいがちである。しかし、筋線維の走行によって捻れが生じたり、筋束が収束したり、複数の筋束によって複雑な構成が作り出されたりするなど、1つの筋にはさまざまな内部構造がある。個々の骨格筋を単離することによって、名称が与えられている1つの筋の中には、さらにいくつかの構造が隠れていることがわかる。それらの作用の集合を理解することで初めて筋を理解することができるという著者らの「骨格筋の解剖学」についての思い入れと考え方が示されている。運動器としての骨格筋の研究では、起始と停止に注目しがちであるが、筋そのものを理解する新しい「骨格筋の解剖学」こそが、スポーツ医学やリハビリテーション医学などにおいて、極めて重要であることを示している。

著者らについての紹介は、私などが述べるまでもなく知られているところであり、本書にも記載されてある。これまでの長い経験と蓄積、そして意欲的な研究者の努力が、まさに新しい解剖学として結実したものとする。